《講演記録》

谷崎文学の思想
――『痴人の愛』を中心に――

小泉浩一郎

こんにちは。本日は、一般に女性崇拝の文学であり、男性マゾヒズムの文学とも言われている谷崎潤一郎の文学が、思いがけなくも日本近代天皇制（＝明治天皇制）批判という鋭く深い思想性を持った文学――一種の思想小説、もしくは文明批判小説であるということを、作品『痴人の愛』を中心にお話申し上げたいと存じます。尤も谷崎自身は、そのようなことを一度も発言しておりません。そこに谷崎の文学者としての非常な用心深さがあります。そこで、谷崎文学における、そのような思想の存在は、谷崎の創作――小説とか戯曲などからのみ、帰納され得るものであると云うことになります。

早速、本題に入らせて頂きますが、資料の四枚目に明治四十三年（一九一〇）九月、第二次「新思潮」創刊号に発表された『誕生』という戯曲の全文を載せてあります。これは、藤原道長の長女であって、一条天皇の中宮彰子が皇子（後の後一条天皇）を産む御産の話です。色々の物の怪、怨霊や生霊がやってきて呪いをかけ、産ませまいとするが、国家的儀式めいた盛大な加持祈祷が効を奏し、漸く産まれます。その時、産まれたばかりの赤ん坊を抱いて、祖父道長の言う白が凄い。それが「（微笑みつつ、ぢッと皇子の泣顔を見入り）おゝお勇ましいお泣き声ぢや。その御声が麿に取つて此上なき宝。何、何と仰せらるる。うむ、宜いわ、宜いわ。何事も此の祖父が心得て居り申すわ。あはゝゝゝ。」と云うものですね。

この道長の白が余りに凄いので、戯曲『誕生』のモチーフや主題がそこにあるかのように一瞬錯覚させられます。ところ

が、よく考えてみると、それはめつぶしであって、真の主題がそこにある訳ではないのです。なぜかと言うと、この一幕一場の短い戯曲の内容の大部分は、中宮彰子の御産、それも難産をめぐる周囲の騒動です。先に申しましたように色々の物の怪、生霊や死霊がやってきて御産の邪魔をする。それを祓い除けようと様々の加持祈祷が行われる。それらの騒ぎを背景として、道長の邸に仕える多くの女房達、又道長の息子頼道、娘威子などの兄弟姉妹、そして道長自身迄が登場して、中宮の容態を気遣い、又、自分自身の将来を気遣う。要するにこの戯曲のプロットは、御産をする彰子の身体を中心に展開する。彰子の身体がドラマの主役なのですね。

明け方になって漸（ようや）く皇子が誕生する。しかし、皇子を抱きながら道長の言う白が先に見たようなものであれば、皇子さえも主役ではありません。中宮彰子が皇子を産むことが重要であることは言う迄もないが、抑も皇子を宿す彰子の身体がなければ天皇というものは、この世に誕生することができないのだ、況んや道長を始めとする他の人間達の運命をやと谷崎は言おうとしているように思われる訳です。そこに、この戯曲における父道長の娘彰子への崇敬の念の発生する所以も亦あるのです。

以上を要約すると、『誕生』の主題は、この日本という国土において一番貴く偉大なのは、女性の身体に宿った天皇よりも、天皇を産む女性の身体なのだ、ということを、戯曲『誕生』の作品構造を通じて、谷崎は言っているのだと言うことになるでしょう。それを作品構造を通じて言っている処に谷崎の文学者としての用心深さがあります。なぜ用心が必要かと言えば、産まれてくる天皇より、天皇を産んだ身体、つまり女性の身体の方が偉いのだと言う不敬にして不遜な思想を表現しているのが戯曲『誕生』であるからです。

勿論、戯曲『誕生』でも、産まれてくるのは男（おとこ）皇子でなくてはなりませんでした。しかし、この事態は又、男皇子（＝男性天皇）そのものよりも男皇子を産んだ女性の身体の方が貴く、偉いのだという一層過激な論理に直ちに逆転し得るのです。こうして、戯曲『誕生』の不敬にして不遜な思想は、直接的な言語表現や登場人物の会話、又は独白を通じてではなく、作品構造を通じてのみ表出されなければならないことになります。

なぜ、作品構造なのかと言えば作品構造と言うものは、主観的にどのようにでも弁解可能なものだからです。詰り、その主観的にどのようにも解釈できるという原理的曖昧さを逆手に取って、作者の本音（作品の主題）を隠蔽できるからです。

しかし、疑われないに越したことはない。疑われる可能性さえできる限り少くする方が良いに極っている。そこに現代から遠く離れた「一条天皇の寛弘五年（＝一〇〇八、講演者注）九月十一日朝、京都藤原道長邸に於ける出来事とす。」という作品冒頭の卜書きに記された作品発表時の現代を一〇〇二年も遡るものとしての時間設定と、華やかな摂関政治の中心人物たるべき藤原道長の邸という絢爛豪華な空間設定の妙があり、かつ又男皇子誕生の物語という一見ありふれた王朝戯曲としての枠組が作者によって選択された理由があると言って良いでしょう。作品末尾における道長の白もこの範疇に属するものです。

しかし、それは一面、私が先に解読したような谷崎の天皇制に対する根本的な見方、つまり天皇制とは女性の身体を起原とし、それ故、女性性、もしくは女性原理性を本質とするものだという、明治天皇制の男性原理性に対峙・屹立する真の〈もう一つの天皇制〉観を打ち出すには恰好の時空、恰好のジャンル及び素材でもあった訳で、この隠蔽と表出という相対立する二つのモチーフが交互に鬩ぎ合うところに戯曲『誕生』のドラマツルギーの根本原理があります。その上で、これら二つのモチーフを成功裡に両立しえた谷崎の文学的才能と同時に平安朝の故事、風俗、宮廷の人間関係に迄精通した深い学殖―そして何よりも真のモチーフを官憲に悟られまいとして数々の設定を生み出した谷崎の徹底した思慮深さに私は舌を捲かずには居られないのです。

戯曲『誕生』をめぐって最後に指摘しておきたいのは、この作品は、既に見たような谷崎の〈もう一つの天皇制〉観の誕生を見るべき作品ですが、同時にそれが、女性の身体への拝跪、崇拝という谷崎の生涯にわたる不易のモチーフの誕生でもあったのではないか、ということです。いや遅ればせながら申し上げれば、むしろ戯曲『誕生』は、この後のモチーフとの関わりで解釈されることが一般でありましょう。

しかし、今迄見てきたような考察がそれほど不適切なものでないとすれば、少くとも反近代天皇制の思想という文明批評的モチーフと女性の身体に対する崇拝という谷崎固有の耽美的姿勢とは、同時に誕生していると考えられる訳で、これをもう一

歩掘り下げると、谷崎の女性身体崇拝の思想は、反近代天皇制の思想―〈もう一つの天皇制〉の思想と表裏一体のものであるとも言うことが出来、さらには、谷崎の女性身体崇拝の文学と云うものは、〈もう一つの天皇制〉という女性原理的世界観の必然の産物であり、この後者こそが前者の母体である、と云うような思いも寄らない結論もしくは仮説に迄至る訳です。寧ろ今後の谷崎研究は、その方向性においてこそ豊饒な未来が約束されているのではないか、とマアそんなことを考えさせられる訳です。

× × ×

次いで谷崎は、明治四十三年十月の「新思潮」に『象』という戯曲を発表します。これは江戸中期に実際に日本に渡来した象が江戸市中を練り歩く様子を武士、僧侶、町人など様々な見物人達が勝手なことを言いながら送迎する話です。ところが、将軍上覧のために象が江戸城内に入る段になって、余りにも大きいその頭が半蔵門につかえて動きが取れなくなる。この象の頭が大きくてつかえてしまうところが作品の味噌です。結末に、こうあります。

町家の隠居　それ、半蔵門の方を御覧なさい。象の体が御門を一杯に塞いで了ひました。

老年の武士　成る程。――はてな、首を半分御門へ突つ込んだまゝ、後へも先へも動かれなくなつたやうぢや。

町家の隠居　多勢寄つて蝟集つて大騒ぎをして居りますな。

老年の武士　小さな門へ、大きな獣を入れようとするのは、若い者の無鉄砲ぢや。

町家の隠居　左様でございますね。

両人顔を見合はせ、暫く黙したるまゝ下手へ対ひて佇立す。

そこで、この象の頭とは何であるか。それを、作者である谷崎の頭脳の大きさ、柔軟さを隠喩（メタファー）したものであると解釈すると良く分る。江戸城は皇居、つまり明治天皇制の隠喩です。俺の頭の中の世界―つまり、高遠にして雄大な〈もう一つの天皇制〉の思想など、せせこましくて、ちっぽけな近代天皇制（＝明治天皇制）の思想では、己の思想の反逆性どころか、そのような思想の存在することすら、気づくことも理解することも出来はしめえ、という作者の江戸ッ子弁の啖呵がどこからか聞こ

えてきそうな作品です。つまり、近代日本の検閲制度への大胆不敵な挑戦なのです。しかし、従来の研究では意図不明の駄作（？）という評価になっているようです。

翌十一月の同じ「新思潮」に谷崎は、有名な『刺青』という小説を発表しました。江戸の刺青師清吉が理想の美女（「平清の女」）を見出し、その背中に精魂込めて巨大な女郎蜘蛛を刺る。翌朝麻酔薬から醒めた女が朝日に女郎蜘蛛の刺青を燦爛と輝かせつつ、清吉を流し目で見て、「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心をさらりと捨てゝしまひました。――お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」と言うところに、男性を肥料として、益々美しくなって行く谷崎的な女性、つまり〝女帝〟の誕生を見るのが従来の解釈で、私も基本的には賛成です。しかし、そのような従来の解釈は、谷崎の意図の半分を言い当てているに過ぎない。

ここで「平清の女」に対して仮りに用いた〝女帝〟という語は、肉体によって男性を征服する女という程の意味の比喩に過ぎませんが、それが実は文字通り女性天皇の隠喩でもあることは、次の十二月、「新思潮」に谷崎が発表した『麒麟』という小説を見ると良く分ります。小説『麒麟』は、中国の古代、春秋時代に儒教の祖孔子が魯の国を逐われ、諸国流浪の旅の途中、立ち寄った衛の国でのエピソードが素材となっています。衛の国の国主霊公は妃南子の美しい肉体に溺れ、南子の言うが侭に暴政を布いていたのですが、孔子の感化によって政事に熱心になります。そこで、孔子を敵と見做した南子は彼を脅迫して国外に退去させる。そして孔子が衛の国を去った後、国主霊公は再び南子の支配下に戻るという話です。そこで孔子の去ったその夜、南子の閨を再び訪れた霊公に彼女が言う白が凄い。――「あゝ、たうとうあなたは戻つて来た。あなたは再び、さうして長へに、妾の抱擁から逃れてはなりませぬ。」

『麒麟』とは、英雄・偉人の出現を祝う中国古来の伝説上の動物です。動物園のキリンではなく、キリンビールのラベルの麒麟です。その麒麟も、又孔子に似ているという中国古代の聖王、堯や舜や禹の徳の力も、遂に南子の肉体の魅力には敵わなかったと云うのが一篇の主題ですが、谷崎の真意は、この作品に国家という新しい枠組を与えたところに示唆されていることを見逃してはならないでしょう。『麒麟』の霊公は『刺青』の清吉の後身、南子は「平清の女」の後身なのですが、「平清の女」

は単なる町人の娘ですが、南子は国主霊公の妃なのですね。清吉と霊公との関係についても同様のことが言えるでしょう。その結果、作品の示しているのは、男性君主が女性君主と入れ替るという実質的な君主交替のドラマです。又、霊公の背後には孔子が居て、霊公と南子の対立は徳（＝ロゴス）と肉体（＝エロス）の対立でもあるのですが、それが先に言ったような国家、国政をめぐる支配原理の対立であることを見逃してはならない。ここに『刺青』になかった国家秩序という問題が、密かに設定されているのです。

そこであの『誕生』という作品の、天皇を産むのは、女性の身体であるという谷崎の女性原理的天皇制論を振り返って見れば、南子の霊公、そして孔子に対する勝利は、中国古代、衛の国における逸話という枠組を隠れ蓑とした谷崎の女性原理的天皇制の主張、つまり明治の男性原理天皇制に対する〈もう一つの天皇制〉としての〈女性原理的天皇制〉論の立場からの批判と諷喩であることは、最早確実であると言えるでしょう。つまり谷崎は『刺青』と『麒麟』を併せ鏡として、真のモチーフ、テーマを浮び上らせると云う手の込んだ方法を採っているので、そこに検閲制度に対する谷崎の用心深い配慮があるのです。

こうして見ると、少くとも作品『刺青』を単なる耽美的な谷崎固有の性倒錯趣味の女性崇拝の物語と見るような単純な読み取り方は、もう許されないと思います。

× × ×

谷崎の文学的出発期には、そのほかにも近代天皇制の間隙―つまり、論理的不整合性を巧妙に衝く作品があります。それが『刺青』と同月に、同じ「新思潮」に発表された『The Affair of Two Watches』（「二つの時計の物語」）という現代小説です。この作品は、東京帝国大学の怠惰な学生達―原田、杉、山崎の三人が酒を飲むために色々と金を作る算段を思い巡らすが、結局妙案を考え出せない挙げ句、仲間の持っていた二個の懐中時計を質に入れて金を作り、居酒屋に入るという何の変哲もないストーリーの作品なのですが、三人共に泥酔した意識朦朧の中で、誰かが「尊氏は偉いさ。どうして！秀吉や家康の比ぢやないからな。」と叫んだことが、主人公にして語り手である「私」（山崎）の記憶に残ったという作品末尾の設定に眼目があります。

尊氏とは足利尊氏、あの中世の南北朝の対立の発端となった北朝を刪立した足利幕府の初代将軍です。尊氏は、明治維新の起源をなした名分論という天皇制イデオロギーの流れの中では、〝賊〟とされている人物です。北朝というものは、名分論では偽の朝廷です。そうして名分論は足利、豊臣、徳川と続いた武家の天下を正し、国政の実権を天皇に戻せと称え、明治維新への起爆剤となった。ところが、如何せん、実現した明治国家の主権者である明治天皇は、北朝の血統の方なのですね。ここに近代天皇制の矛盾、ひいては論理的不整合がある。この矛盾が、鋭く噴出するのが、谷崎の『The Affair of Two Watches』が発表された翌年明治四十四年に起った南北朝正閏問題なのです。谷崎は、その前年の十月に発表したこの作品で、既に北朝を評価する作中人物の言葉を以て、近代天皇制のイデオロギーである名分論と現実とのギャップを鋭く衝いた。それが、先の正体不明の―と言っても、その発話者は山崎を除く原田、杉のいずれかではあるのですが―帝大生の言葉なのです。しかし、それは泥酔した誰かの言葉を、これも意識朦朧とした「私」が覚えているという設定でその真偽を国家権力に対して言い逃れできる仕掛けになっているところに、谷崎の検閲制度に対する用心深い配慮がある。何しろ酒の上での話で、水に流すのが一般という慣習を巧妙に利用しているとも言えます。いずれにせよ、谷崎の鋭い時代への嗅覚には、圧倒されます。

こういう訳で、谷崎の文学的出発期には、用心深い虚構で幾重にも覆われているが、近代天皇制への大胆不敵な原理的批判を沢山読み取ることが出来るのです。（他に自己の抱く反逆的思想が官憲に見抜かれて捕ってしまうのではないかという谷崎には珍しい私かな恐怖をモチーフとした『信西』（明治四四・一）と言うような作品もありますが、時間の都合で省きます。）そこで、一体、こういう谷崎の天皇制批判のモチーフは、直接的には何に起因しているのか。

私は、それを、明治四十三年（一九一〇）六月に発覚し、同十二月に大審院結審、翌四十四年一月に幸徳秋水、菅野スガ等十二名が処刑された大逆事件への怒りに発するものだ、と推定しています。谷崎の文学的出発期の先に見た諸作品のモチーフは、日本近代史上最大のデッチ上げ事件と言われ、又憲政史上最大の暗黒事件として今日みなされている大逆事件に示された天皇制国家の暴力化、反動化、そして非合理化に対する深い憤りに発したものであったのではなかろうか。因みに、谷崎における叙上の諸作品の発表の年月日は、大逆事件の発生と終結の歴史的時間の枠の中に総て収まっています。大逆事件を背景に

置くと、谷崎の初期作品の主題が、天皇制とは何かという基本命題への良くこなれた原理的思索の作品的表現であることが否定し難い形で分ってきます。

のみならず、そのような谷崎のモチーフが用心深くはあるが、論理的に否定し難い形で作品に刻印された例が唯一つあります。それが、先に取り上げた『刺青』と云う作品の冒頭部分です。即ち、そこには、

其れはまだ人々が「愚（おろか）」と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。（傍点講演者）

とあるのですが、この中にある「今のやうに」の「今」が汎世界的な二十世紀現代を指すのだ、と云うのが一般的解釈ですが、良く考えて見ると作品『刺青』の発表された「今」、つまり明治四十三年（一九一〇）十一月の「今」でなくてはならない。なぜなら、それは明治四十三年六月に勃発し、現在大審院で審理中の大逆事件を念頭に置いた「今」に相違ないからです。そして、そう見ると作品『刺青』の世界は、そのように「激しく軋み合」う現代日本の時代状況に対するアンチテーゼとして構築された、「『愚』と云ふ貴い徳」を柱とする感覚美の世界であることが分って来ます。大逆事件を直接、間接に批判した文学者は、決して少くなかったことが今日分ってきていますが、谷崎が大逆事件に衝撃を受けて、明治天皇制の原理的考察に取りかかり、男性原理性ではなく女性原理性に天皇制の本質を見出し、男性原理的天皇制としての明治天皇制への批判を中軸とする実作化としての「女帝」の文学の創作に至ったことを仮説としてさえ提起した研究者は、まだ一人も居ないのです。しかし、私は、谷崎の女性身体崇拝の思想は、実に大逆事件に見る近代（＝明治）天皇制の暴力化、非合理化という歴史現象への本能的アンチパシイから発生し、根づき、生長したものであると云う仮説をここに提出することが近代文学研究者としての義務であり、又責務であると思うのです。尤も、ここで云う明治天皇制もしくは近代天皇制とは、今日の平和憲法が規定する象徴天皇制とは以て非なる存在であることは言う迄もありません。

× × ×

谷崎文学の全体像を踏まえてみれば、谷崎の近代天皇制批判のモチーフは、近代日本の危機的状況に鋭敏に対応して文学的

に顕在化するという特徴があります。その意味で近代日本の歴史の中で最も安定した時期とされる大正時代前半期は、谷崎文学から反近代天皇制のモチーフに立つ作品群が姿を消します。しかし、社会矛盾が激化し、日本共産党が地下で結成され、治安維持法が制定される大正後期から、国家がプロレタリア無産運動への激しい弾圧から軍国主義へと傾斜して行く昭和初期、そして昭和十年代の天皇制軍国主義ファシズムの時代にかけて、谷崎は多くの女性原理天皇制の主張に立つ作品群を書き、時代への抵抗の姿勢を貫きました。『春琴抄』『吉野葛』『細雪』などの傑作群がその徴標です。

しかし、今回は、特に谷崎におけるモダニズム時代からクラシシズム時代への転換点と目される『痴人の愛』に絞って、私の蕪雑な話を締め括りたいと思います。

作品『痴人の愛』は「大阪朝日新聞」に大正十三年三月二十日から六月十四日にかけて連載され、その後一旦中絶し、雑誌「女性」に舞台を移し、同年十一月から翌十四年七月にかけて掲載、発表されました。連載終了と同時に改造社から単行本として出版されています。作品の内容に立ち入る前に、とりあえず注意しておきたいことは、『痴人の愛』が雑誌「女性」に連載中の大正十四年四月に反体制思想取り締りの強化を目的とした治安維持法が成立、公布されたこと、第二に、作者谷崎が大正十二年の関東大震災に箱根で遭遇した後、関西に移住し、関西の風土と文化を研究、観察する過程で、モダニズムからクラシシズムへと移行、モダニズム時代の総括、清算としての『痴人の愛』が執筆されたことです。

治安維持法の成立が、日本現代史の転換点の危機的徴標であることは改めて指摘する迄もないと思いますが、『痴人の愛』が関西の風土に身を移してから後の作品であることも、ここで改めて注意しておきたい。つまり谷崎は、以後彼の主要舞台となる関西空間に身を置くことで、関東大震災までの東京・横浜を舞台とする自分のモダニズム時代を批判的に相対化、総括し、清算することが可能になったのだということです。そして無論、このような観点は、谷崎論の常識でもあります。

それでは、谷崎が関西―京阪神空間（因みに奈良は入りません）で発見したものは何かと言うと、それは、薄っぺらな東京文化に染らぬ日本の伝統文化であり、人情であり、風俗です。それらを象徴するものが関西の女性です。つまり谷崎は関西の女性の身体と精神を発見し、以後、関西の女性を実質的主人公とし、女性原理的な関西の文化、風土をバックとする作品を書

き続ける。それは、歴史的には古代王権的な真の天皇制文化に回帰することであった訳です。その頂点が昭和十八年から昭和二十三年にかけて発表された傑作『細雪』です。

この傑作『細雪』を到達点として、それ迄のクラシシズム時代を『細雪』の高見から眺め返すと分ってくることが沢山あります。話をアストレイさせないために言えば、『細雪』は大阪の旧家の三人の娘――幸子、雪子、妙子を主人公とする物語ですが、この三人は、総てが「女帝」つまり女性天皇の隠喩（メタファー）なのですね。幸子は明るく調和的な女帝、雪子は物静かだが芯の強い女帝、妙子は男性を破滅に追いやる凶々しい女帝、この女帝三姉妹が、『細雪』の主人公です。肝腎なことは、これら三姉妹が、東京文化のアンチテーゼとして登場せしめられ、『細雪』に描かれる関西文化圏の生きた象徴たらしめられていることです。つまり、作品『細雪』には二つの文化空間があり、一つは、関西文化空間、他の一つは、東京文化空間。そして作品の主要プロットは、三人がこの二つの文化空間を往復することで成り立っているのですから、ここには谷崎の隠れた意図があるのです。それは、関西文化空間を中心軸として東京文化空間を批判化、相対化することです。因みに作品『細雪』の中では、東京文化は、というより東京空間は、あらゆるものが凶であり、粗悪です。人間から風土、人情、言語迄がカサカサ乾燥して合理的であり、余韻がない、含蓄がない。そして悪いことばかり起る。良いものは宮城と隅田川、そして歌舞伎ぐらい。悪い方の極めつきが戦争です。もう一つ、東京文化空間を象徴するのが家父長制―つまりプチ男性天皇制。実は、蒔岡家は四人姉妹の家で、長女の鶴子は、辰雄という夫を養子に迎えたのですが、鶴は辰に敵わない。三人の妹は、それぞれ女帝なのに、鶴子だけは辰雄に負けて家父長制―つまり男性原理の家の妻として主体を抜き取られて、しょぼくれています。そして鶴子の夫辰雄は銀行員なのですが、やがて東京の丸の内支店長となって蒔岡本家は東京に引越すことになる―因みにこれは事実だそうです。―のだから、谷崎の寓意は明らかです。丸の内と言えば、皇居の内濠の直近の空間です。応（まさ）に辰雄の家は、近代天皇制の男性原理の家で、その上、男の子ばかりが生れるのですから。

それに対して女性原理の家、つまり女性原理天皇制空間のメタファーとして登場するのが次女幸子の蒔岡分家―神戸芦屋の家です。ここでは総てが幸子を中心として運営される。『細雪』で有名な春夏秋冬の行事も総て「女帝」幸子が企画し実行す

る。その世界の男女の関係は、幸子の夫（婿養子）が貞之助という名前であることに象徴されています。貞というのは、夫に仕える妻の貞節が原意ですが、ここでは夫が妻に仕える意です。それでいて仲が良い。さしづめ、英国のエリザベス女王とエジンバラ公との関係ですね。この幸子夫婦が『細雪』の真の主人公です。有名な雪子は、プロットを推進する上では中心人物ですが、必ずしも主人公という訳ではありません。

もうお分りと思いますが、『細雪』は、関西における女性原理天皇制空間を伝統的な、真の天皇制空間として定立し、東京を中心とする男性原理天皇制空間の粗悪性、暴力性、贋物性を密かに、そして徹底的に批判した文明批評小説なので、そこに谷崎における近代天皇制批判の集大成としてのこの作品の位置があります。

さて、このような傑作『細雪』の高見から関西移住によって谷崎が発見したものを端的に要約すれば、それは歴史と伝統に根づいた「女帝」の文化空間であり、近代（＝明治）天皇制の贋物性に対する〈もう一つの（＝真の）天皇制〉空間であったのです。

×　×　×

話を元に戻しますと、そのようなクラシシズム時代の谷崎の到達点としての『細雪』の高見から『痴人の愛』執筆時代の谷崎を振り返ると、関西に移住した谷崎の第一の仕事が、今迄東京・横浜文化圏でムチャクチャやっていた谷崎が、関西で発見した女性原理天皇制文化の空間の現実性を足がかりとして、今迄の彼の仕事を総括、清算し、改めて固有の世界観の表現としての〈もう一つの天皇制〉文学を再構築することであったと云うことになります。それが女帝ナオミを中心軸とする作品『痴人の愛』を産んだ根源的モチーフであったと私は思うのです。

×　×　×

そこで作品『痴人の愛』ですが、この作品の主題が譲治という青年と奈緒美という少女との風変りな恋愛、そして結婚生活の八年にわたる事実を、主人公の河合譲治が「出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのまゝ」（『痴人の愛』一、以下題名略）に書いた男性一人称小説であることは、改めて申し上げる迄もないことでしょう。私は今、「小説」と申し上げましたが、

主人公河合譲治にとっては、それは八年間のナオミとの恋愛、結婚生活の「正直」な、何事も隠さない「有りのまゝの事実」に基づいた誠実な「記録」なのです。そして、その「記録」の内実とは、ふつう夫が世間に向って打ち明けることを恥とする妻との夫婦生活の精神と肉体に相亘る男女関係の機微や秘密なのですから、譲治の言う「記録」とは、実は「告白」の意味であると言って差し支えないでしょう。つまり、作品『痴人の愛』は、正確に言えば、男性一人称告白体小説であると言うことになります。

譲治は、続けて「それは私自身にとって忘れがたない貴い記録であると同時に、恐らくは読者諸君に取つても、きつと何かの参考資料となるに違ひない」云々と述べていますが、それは結末部分での「此れで私達夫婦の記録は終りとします。此れを読んで、馬鹿々々しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、い、見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません。」という叙述と相俟って、作品『痴人の愛』で遂行される「告白」の内容の真実性や有効性に対する主人公であり、語り手である譲治の深い自信を示しています。それは殆んど夏目漱石『こゝろ』の主人公先生の自己の過去から得た思想の内発性に対する深い自信と衿持とを連想せしめる程です。

漱石の『こゝろ』、その中核を占める「先生と遺書」の篇と谷崎の『痴人の愛』は男性一人称告白体小説であると云う点でも共通しています。大体、日本近代小説では、男性一人称告白体小説に傑作が多い。鴎外の『舞姫』、田山花袋の『蒲団』、武者小路実篤の『お目出たき人』、志賀直哉の『和解』等々、数え上げればきりがない。私小説であるか虚構小説であるかはともかくとして、どうしてこうなるかについては、色々な考え方があるでしょうが、先に見てきたような天皇制という与えられた枠組の中で言えば、これら作品の主人公は、悉くプチ天皇、つまりそれぞれ「家長」か「家長」の卵であることから来る事情があろうと思います。

しかし、とりわけ漱石『こゝろ』と谷崎『痴人の愛』とは相似性が高い。なぜなら、これら二作品は共に、男性的自我もしくは男性原理の自己解体小説であったからです。二人の作者は共にこれらの作品で、自己の拠って立つ世界観の基軸を精神から肉体へ、ロゴスからエロスへ、そして男性原理から女性原理へ移すことの歴史的必然性を認識しているからです。そして、

この歴史的必然性を必然性として受容しえなかった『こゝろ』の主人公先生は、精神に殉じて死に、必然性を必然性として受容しえた『痴人の愛』の主人公譲治は、自己の世界観の基軸を精神から肉体に移して生き続けるのです。

見方を代えれば、『こゝろ』の先生が家長であったように、『痴人の愛』の譲治も家長です。彼らは二人とも子供のない夫と妻二人暮しの家を構成しているが、先生は奥さんに対して、家長であるが故に、奥さんに自己の過去を告白することが出来ず自殺する。先生が自殺するに当って「明治の精神」に殉死すると言っているのは、決して矛盾ではない。「明治の精神」とは、明治国家の家長である明治天皇と共にあった精神だからです。つまり、先生もプチ〈明治天皇〉であったから、明治天皇の崩御した後、時勢遅れと自己を認識して生命を絶つのですね。先生は、明治天皇制の中で人となり、明治天皇制に殉死するのです。

『痴人の愛』の譲治もプチ天皇としての家長でした。しかし、彼は死ぬ必要はなかった。なぜなら、彼は家長権をナオミに譲ったからです。だから、彼の名前は譲治なのです。譲治などと言う名前は、世間に多いが、作品『痴人の愛』における譲治と妻ナオミとの確執、闘争に想いを致せば、治世を譲るという意味の譲治という命名法は、作品『痴人の愛』ではこれ以外になく、必然なのです。男性家長譲治に代って、女性家長ナオミが位につく。つまり、男性天皇が女性天皇に位を譲って、プチ天皇制としての家＝国家という制度が永遠に安定する。そこに男性中心原理的天皇制というものが日本近代の拵え上げた疑似天皇制＝モダニズム天皇制であり、伝統的な真の天皇制というものは女性中心原理的天皇制であるとする谷崎の文明批評にして国体批判のモチーフが、巧みにメタファーされている訳です。

『痴人の愛』という作品は、そういう意味で日本近代に稀なる思想小説、文明批評小説です。そして、天皇制の本質が、女性原理性―感情とか感覚とか肉体とかエロス性にあるべきで、精神とか理性とかロゴスとか―男性原理性とかは、そこから派生したもの、従属的なものであるべきだという谷崎の天皇制観は、単に日本の天皇制論の範疇に留まるべきものでなく、汎二十世紀の男性原理的な世界的近代ののりこえの方向性を示すものとして今日益々思想としての先駆的アクチュアリティを主張しえていると言って良いでしょう。

因みに、漱石も『こゝろ』以後、『道草』『明暗』の世界で男性原理に対する女性原理の優越性こそ、来るべき世界観であることを私達に指し示していることも申し添えて置きます。以上で、私の拙ない話を終ります。長時間、御静聴頂き、ありがとうございました。（終）

（こいずみ・こういちろう　東海大学名誉教授）

二〇〇九年度十月十日成城国文学年度大会　講演